

咸臨丸終焉150周年記念事業の趣旨

今年2021(令和3)年は、幕末から明治にかけて我が国の歴史、そして、航海術の進歩・発展に多大な功績を残した「咸臨丸」が、木古内町泉沢サラキ岬沖で座礁・沈没して150年を数えます。



咸臨丸は1857(安政4)年、日本の海軍の近代化と祖国防衛のため、13代将軍徳川家定がオランダに発注・建造されました。

1860(安政7)年、日米修好通商条約の批准書の交換のため、幾多の嵐に遭遇するも太平洋の横断を成し遂げました。その偉業により、生涯に於いて1番輝いていた時期でもあります。乗船者の中には、木村摂津守、勝海舟、福沢諭吉、中浜万次郎等がおり、彼等が日本の近代化に果たした功績は計り知れません。

咸臨丸は、戊辰戦争の際には、榎本武揚が率いる艦隊の一隻でしたが、嵐に遭い、明治政府・開拓使の支配下に置かれます。戊辰戦争に敗れた仙台藩片倉小十郎家臣団は、蝦夷地の開拓と防衛を願い出ており、苦難の末移住の許可が下ります。その輸送に当たったのが咸臨丸で、401名を乗せ小樽を目指すも、サラキ岬沖で座礁・沈没となりました。それから150年、幾多の探索にも関わらず、今日まで、その確証を手にすることが出来ないうちです。

木古内町観光協会「咸臨丸とサラキ岬に夢みる会」は、「まちづくりは自らの手で」を原点とし、咸臨丸の歴史的検証によってその偉業を後世に伝えるとともに、終焉の地であるサラキ岬の環境を整備し、人々が集い・憩う交流の場を創造することを目的として活動しております。

今年は、咸臨丸終焉から150年目に当たることから、全国の咸臨丸ゆかりの地で咸臨丸の歴史研究やまちづくりに取り組む人々と共に、咸臨丸の歴史的業績を再確認し、活動のさらなる発展を期して「終焉記念式典」・「資料展示」や、咸臨丸の歴史を辿る「講談」を上演することになりました。このことにより、地域住民の咸臨丸にたいする更なる興味・関心が高まり、愛すべき存在となることを願ってやみません。

こうした趣旨のもと、咸臨丸の果たした歴史的意義を再確認し、私たちの誇りと地域づくりにつながるものと考え、本事業に取り組むものです。